

いしかわ自然史

89号

発行日
2023年8月25日

ホトケドジョウ(成魚)



生息環境の1例

金沢市角間産の標本
(石川県立自然史資料館収蔵)

ホトケドジョウ

石川県水産総合センター 石山 尚樹

夏の風物詩であるどじょうの蒲焼きにはドジョウが使われますが、今回は湧水に生息し里山を代表する生物であるホトケドジョウを紹介します。

ホトケドジョウ *Lefua echigonia* は大きさが6 cm程度であり、ひげが8本、ドジョウに比べると円筒形で、かわいい顔をしています。東日本を中心に分布しており、地域によって模様が異なります。丘陵地や扇状地などの湧水の流れがある水路やため池に生息しています。繁殖期は5～6月であり、増水でできた一時的な水域が繁殖場所になります。このような水域では、稚魚とアカハライモリの幼生が同所的に見られることがあります。両種の外観は非常に似ており、うっかりすると稚魚をイモリ幼生と見間違えるかもしれません。イモリ幼生は外鰓と脚があるので、じっくり観ると稚魚と区別できます。

県内では宝達志水町以南の丘陵地を中心に点在して分布しています。他県では本種を見かける機会がありますが、北陸3県では分布が非常に限られており、富山県では絶滅状態です。

石川県では、当初は扇状地の湧水帯で分布が確認されていましたが、様々な生物調査により丘陵地で新たな生息地が発見されています。引き続き小規模な生息地が見つかる可能性は高いです。平野部の生息地は1970～80年代に浅野川、犀川と手取川扇状地で記録がありましたが、その後の開発などで生息地が消失しました。一部は標本として自然史資料館に収蔵されています。丘陵地の生息地においても消失が続いています。県内で絶滅の恐れが高いことから2006年に条例で石川県指定希少動植物種として指定され、生息地の保全が図られています。

本種が見られる場所は、いしかわ動物園および辰口丘陵公園のジオトープがあります。成魚を見つけるのは難しいですが、稚魚は水面を覗くだけで見られるかもしれません。また、いしかわ動物園では水槽越しに見ることができます。

ひっそりと生活していますが、生息地は開発の影響を受けやすい場所であるため、まずは皆さんに関心を持っていただくことが大切です。

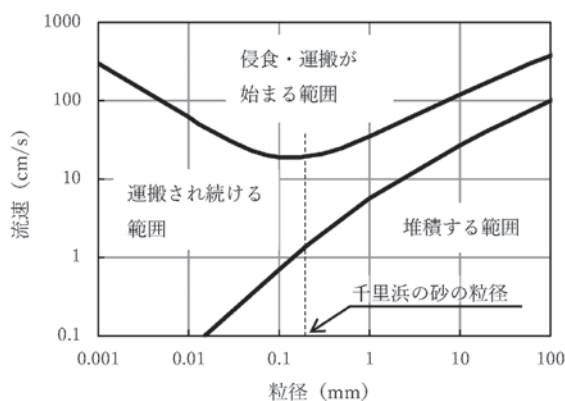
千里浜で小石がゴロゴロする光景が意味すること

石川県立大学環境科学科 百瀬 年彦

細かい砂粒を特徴とする千里浜で、小豆大から親指大サイズの小石がゴロゴロする光景を目にするようになった。3年前あたりからは、侵食期（冬期）だけでなく堆積期（夏期）でも見られるようになった。とくに荒天後の千里浜南部で観察できる。千里浜南部は、細砂と小石とが混在する砂浜であり、侵食により細砂が減ったため小石が目立ち始めたと理解している。

千里浜の小石には花崗岩質が多く見られる。この周辺で同じ岩質の山は宝達山しかないので、宝達山由来の小石と推測される。実際、そこを源流域とする宝達川の上流には、千里浜の小石と類似したものが堆積し、宝達川の河口も花崗岩を主とした岩石のたまり場となっている。また、宝達川が天井川であることを踏まえると、昔の宝達川は土砂供給河川であったと想像できる。千里浜の小石は、宝達山からの過去の産物であり、それが砂浜に埋もれていたのだろう。ところが、この小石は、砂浜侵食によって顕在化するようになる。

細砂は水の流れによって動きやすく、小石は動きにくい（ユルストローム図を参照）。また、細砂は飛砂としても動きやすく、小石は動きにくい。このため、砂浜侵食とともに細砂は減るものの小石は減りにくいので、砂浜での小石の割合が増えることとなり、小石がゴロゴロする光景が見られるようになる。この光景は砂浜侵食が進行している証であり、細砂が減っていることの証ともいえる。



ユルストローム図

千里浜の砂(約0.2mm)は、流速20cm/s程度で侵食・運搬が始まるが、その流速では千里浜の小石(数cm)は動かない。

砂浜侵食は、砂の供給と損失のアンバランスで生じる。砂の供給が減ったり、損失が増えたりすれば、砂浜侵食は進行する。千里浜で石がゴロゴロする光景が、堆積期（夏期）にも見られるようになったことを踏まえると、砂の供給が減っていることが砂浜侵食の大きな要因と考えられる。砂の供給の減少は、たとえば河川・海岸構造物（ダムや頭首工、港湾）の建設により、土砂の堆積が生じたり、土砂の移動が妨げられたりすることによって引き起こされる。

千里浜の細砂は、手取川由来と言われる。手取川河口から放出された土砂のうち、細かい砂粒は沖合に運ばれ、対馬海流によって千里浜に運ばれるという。手取川河口から千里浜への土砂移動にとって、大きな障壁となるのが金沢港である。水深約15mの沖合まで突き出た、長さ約3kmの防波堤は、土砂移動を妨げているのではないだろうか。そして、そのことが千里浜で細砂が減っていることと関わっているのではないだろうか。こうした疑問に答えるため、金沢港周辺を含めて手取川河口から千里浜の範囲で、海域や陸域の砂を採取し分析を進めている。

千里浜は、細砂と小石とが混在する砂浜である。細砂が主体であるからこそ、その間隙は毛細管のように働き、砂浜は適度に湿った状態になりやすく、そのおかげで固く締まって車が走れる。最近はこの細砂が減って小石が顕在化し始めている。細砂の減少要因を明らかにすることが求められる。



小石がゴロゴロ(今浜IC付近) 撮影日2022年10月20日

祝！世界認定！！白山手取川ジオパーク

白山手取川ジオパーク推進協議会 日比野 剛

◇白山市全域をエリアとする白山手取川ジオパークが、2023年5月にユネスコ世界ジオパークに認定されました。2010年に活動を開始してから、10年以上経っての認定で苦労もありましたが、現在地域では盛り上がりをみせています。



5月24日の夜、ユネスコ執行委員会において認定の承認を受けた際、集まった関係者で喜んだ瞬間



イメージキャラクターのゆきママとしずくちゃん(ゆきママの左肩)も加えて、関係者による記念撮影

◇白山手取川ジオパークは、白山市全域をエリアとするジオパークで、桑島化石壁を代表とする恐竜時代の地層を中心に約3億年前から現在に至る大地の成り立ちを基盤として、その上に成り立つ動植物の営みや人の歴史・文化・産業などに関わる様々な資源を活用して、保護保全、教育、ツーリズムなどの活動を展開してきました。

2011年に国内版の日本ジオパークに認定された後、2013年と2015年に世界ジオパーク認定に向けた国内推薦を得るための申請をしていましたが、2回とも見送りとなりました。ジオパーク活動の取り組み実績がまだ少ないことや、地域全体での盛

り上がりが少ないことなどの指摘がいくつかあり、その後は課題解決を図りながらじっくりと活動を積み上げていました。2020年には再び国内推薦を得るための申請をし、ようやく推薦を得ることができましたが、残念ながらコロナ禍と重なり、海外からの審査員を受け入れることができず、現地審査は延期となってしまいました。いろいろとスムーズにいかない状況ではありましたが、2022年によく海外審査員による現地審査を受け入れることができ、その後は比較的順調に、認定勧告を経て、ユネスコ執行委員会での承認までたどり着くことができました。このように苦労も重ねながらの認定であったため、認定の瞬間は、特に活動に積極的に取り組んできたガイドや学習支援員、連携協定を結んできた地域団体の皆さんなどにとっても、感極まる瞬間になったかと思います。

◇ユネスコ世界ジオパーク認定は、地域にとっての悲願ではありましたが、認定はゴールではありません。むしろスタートで、今からの活動がさらに重要になってきます。ユネスコ世界ジオパークの活動は、大地の成り立ちと生態系、人の営みに関するこのつながりを意識しながら、持続的な地域発展に取り組むプログラムです。さらにその先には、地球とのつながりまで意識し、国際的な環境と人間社会の持続的発展まで考えています。今後も、次代を担う子どもたちをはじめとして、あらゆる世代においてそのような活動の担い手を育成していくことを進めていきます。



教育やツーリズムなどで、地球とのつながりを意識してもらいながら、地域の魅力を体感してもらう活動を進めていきます。

野外研究のすすめ ～その魅力と方法を高校生に直に伝える～

石川県立自然史資料館 学芸員 桂 嘉志浩・嶋田 敬介

【実施の背景】

スーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定されている金沢泉丘高等学校では、理数科2年次に課題研究が行われます。研究テーマは多岐に及びますが、室内で実験を行う活動が多いそうです。そこで、テーマ設定の視野を広げるため、1年3学期(2023年3月3日)に野外研究の魅力とその方法について、地学分野・生物分野の講義を依頼されました。

【地学分野のねらいと内容】

地学は私たちが暮らす地球やその成り立ち・歴史を研究する、最も基礎的、且つ、総合的な学問分野です。現在では地学は細分化されて、それぞれが独立した専門分野になっています。また、科学技術の発達により、それぞれの分野において、室内での実験やコンピューターを駆使した分析などが研究の主流になっています。

しかし、研究に必要な標本やデータを集めるには、やはり古典的な手法である野外調査が必要不可欠です。また、研究成果を出すためには、細分化された分野の知識やデータを結集して、思考しなければなりません。野外調査を実施するには体力が必要となりますし、他の研究者などと一緒に実施するため、語学力を含めたコミュニケーション能力も必要となります。

今回の講義において、将来地学の研究に従事することを望んでいる学生の皆さんに、地学分野の特性を理解していただくとともに、学力だけでなく総合的な“力”が必要であることを伝えました。現実的な問題として、現在の日本における大学入試を主たる目的とした教育と、専門性が活かせる就職が限られている実情から、地学は敬遠されつつある学問分野ですが、生徒の皆さんに少しでも地学に興味を持っていただけたのであれば嬉しい限りです。



講義の様子（地学分野）

【生物分野のねらいと内容】

生物多様性の保全や絶滅危惧種の保護を目的とした3つの研究(昆虫)を紹介しました。対象は、絶滅危惧種のイカリモンハンミョウと、外来種のシタバニハゴロモやキマダラカメムシで、それらの分布や生態調査の結果を、動画や写真等を交えて解説しました。いずれの事例も、県内の砂浜や公園・森林などがフィールドで、学芸員として行っている研究活動の一つです。

講義で生徒たちに一番伝えなかったのは「野外のフィールドで生き物の“生き様”を直に見てほしい」ということです。これは野外研究の魅力であるとともに、この過程がなければ、地域の自然や生態系、個々の生命現象を総合的に理解することはできません。また、「研究では当たり前や常識を疑い、常になぜ?という意識を持つことが重要」ということも伝えました。教科書や図鑑に載っていることが全てではなく、どのような分野でも、まだ調べられていないだけで、未発見・未解明の事柄は意外にも残されているものです。

最後に「研究の結果を記録に残し、論文や学会発表などで成果を積極的に公表すること」を勧めました。今回の講義を通して、生物学や自然科学だけでなく、ふるさと石川の自然にも興味を持つ人が増え、その中から将来研究者になる人が現れてくれたら嬉しいです。

【生徒の感想・今後について】

実施後に、生徒からの感想文やメッセージをいただき、今回の講義が生徒たちの活動の幅を広げ、科学系進路の魅力伝える良い機会になったと思います。現在、高校では課題研究や探究活動が重視されています。今後も、資料館の学芸員として、今回のような泉丘高校の取り組みに積極的に協力し、県内のSSH事業にも貢献できればと考えています。



講義の様子（生物分野）

企画展「草木染めの自然史」を終えて

石川県立自然史資料館 中野 真理子

自然史資料館では、草木染めをテーマとした企画展「草木染めの自然史」(会期：2023年2月4日から5月7日)を開催しました。本展示では、日本の伝統的な染料植物に加えて、野山の草木、庭木、雑草など多くの植物が草木染めに利用できることを紹介しました。染料植物は世界で3,000種以上が利用されているので、その中から身近なものや薬用植物などを中心に取り上げました。

今回の企画展が大変だったのは、いろいろな植物で染めた布を展示するために、季節に合わせて染料とする植物を探して採集にまわったことと集めた植物で実際に染色を行ったことです。それぞれの植物で採取や染色に適した時期があるので、時期を逃さないようにするのに苦労しました。事前にどんな植物が染料になって、どのように染色するのかについて文献を調べ、候補の染料植物を選び出すのにも頭を悩ませました。

クサギは野山に普通に生える木で、秋に光沢のある青紫色の果実がなります。果実を使って、野生植物では珍しい青が染まるといので、ぜひとも染色したいと思い、クサギの果実を探し集めました。冷凍保存し、いつでも染められるので、冬になってから染色しました。果実をつぶしてできる青い染色液で布を染めると、期待していた通りの美しい青色になりました。紅紫色のがく片を用いて染めると、銀鼠色が染まりました。同じ植物でも、染色に用いる部分の違いで染まる色が異なるのも楽しいものです。



青紫色のクサギの果実から美しい青色が染まる。写真の木だけでは量が足りなかったので、いくつかの木を探して採集した。

クサギと同じく、野山に普通の常緑樹のソヨゴの葉からは赤っぽい色が染まります。常緑の緑色の葉から赤色が染まるのが不思議です。今回の展示では、晩秋にかさかさした枯葉を集めて染色に用いました。葉を熱煎し、染色液をとりますが、煎じてすぐの液は薄い茶色で、ほとんど赤くありません。ある文献で調べた通りに、液を1～2日置くと液の色が赤く変わりました。その赤色の染色液で、布を赤っぽく染めることができました。ソヨゴの葉で赤っぽく染まるといっても、媒染剤の種類が変わると、染まる色は違ってきます。灰汁媒染で薄赤色、ミョウバン媒染で赤樺色、鉄媒染で紫黒色、銅媒染で小豆色、というふうに染まる色の変化に富んだ色合いに驚かされました。



左：クサギで染めた綿布。上は果実で染めた青色(無媒染)、下はがく片で染めた銀鼠色(鉄媒染)。

右：ソヨゴで染めた綿布。上から、薄赤色(灰汁媒染)、赤樺色(ミョウバン媒染)、紫黒色(鉄媒染)、小豆色(銅媒染)に染まっている。

今回の展示制作を通して、草木染めの手法、生薬とのかかわり、日本特有の伝統色、それぞれの染料植物の季節変化など、草木染めに関係するさまざまな自然史情報を得ることができました。その全部を展示で紹介することはとてもできなかったのが残念でしたが、草木染めの企画展を開催したことで、草木染めに関心を持つ方々に植物の多様性を知っていただく良い機会を提供できました。草木染めにまつわる自然史の不思議を、企画展を終えたこれからも続けて情報発信していきたいと思います。

白山瀨波のカタクリと尾添のブナオ観察舎

上田 喜久雄

今回(4月20日(木))の自然観察会は、春の花カタクリと白山の野生動物たちの観察です。金沢駅港口の大型バスに参加者21名が乗り込み出発しました。コースは白山市瀨波のカタクリ群生地と白山尾添の「ブナオ山観察舎」それに「ふれあい昆虫館」です。

国道157号を瀨波川で左折し、天然温泉「白山里」を横に見て、瀨波キャンプ場でバスを降りました。オンソリ山(888m)の登山口からエイ谷川沿いの急坂を上るとすぐ、カタクリの群生地に着きます。カタクリはユリ科、秋から冬は球根で休眠してじっと春に備えています。そして春になると休眠から覚め、細い葉をだして光合成を始めます。その後、花茎が伸びピンク色の花を咲かせます。「春の妖精」とも呼ばれる花が咲いているのは1週間ほどです。暖冬の影響で例年より10日以上早く、ここでは3月下旬に開花して、4月に入ってすぐに満開を迎えたようです。花はもう終わっており、斜面一面濃い緑色の葉っぱで、花茎の先に果実を付けているのが見られました。葉を広げたカタクリですが、これから夏に向かい光合成で球根に栄養を蓄えて、再び来年の春に備えるのです。

このカタクリは、瀨波の人たちがオンソリ山の登山道を整備したとき道の際に広がって、年々充実して今では日本でも1、2を争う群生地とのこと。今ではたくさんの自然愛好家が来るようになりました。登山道入り口に「瀨波キャンプ場」がありますが、ここは株式会社「白山瀨波」が運営しています。事前の下見のときに、その管理人から車の路上駐車やトイレの無断使用がいて困るという話を聞かされていました。

我々も十分に注意をしていたのですが、何人かが無断でトイレを使っていると苦情をもらってしまいました。下見の時に申し込んだことを管理人が忘れていたのだらうと思いますが、使用許可証を書くとかすれば防げたトラブルだったと思います。お互い自然を楽しむことが目的であり、互いに譲り合う気持ちが大事だと思います。なんとなく後味の悪い結果になりました。

午後の「ブナオ山観察舎」は白山白川郷ホワイトロードの無料区間の入り口付近にあり、「国立公園白山自然保護センター」付属の施設です。尾添川をはさんだ対岸のブナオ山に生きるニホンザル、ニホンカモシカ、ツキノワグマなどやイヌワシ、クマタカもみられる国内でも珍しい施設です。開館中は2名の解説員が常駐しており、その方から興味ある話をたくさん聞けました。タイミング良く、ツキノワグマの成獣が芽吹いたばかりの草を食べている場面に遭遇しました。双眼鏡で観察すると黒い塊が動いているようですが、解説員が望遠鏡の画像をプロジェクターに大きく映し出してくれましたので大変よく見えます。やがて満腹になったのか、残雪の上に移動し腹ばいになり昼寝を始めました。当日は初夏を思わせる陽気で、クマも残雪の上が気持ち良かったのかもしれませんが、自然はのどかだなどと勝手な思い込みでいると、解説員から雄グマが雌の連れてきている子グマを殺す「クマの子殺し」の話を聞きました。生まれて間もない子を連れてくる雌グマは発情しないからだそうです。観察舎の周りのカタクリの花は今が見ごろでした。その後、「ふれあい昆虫館」を自由見学して帰路につきました。



オンソリ山のコナラ林斜面



ブナオ山観察舎にて

第34回 通常総会報告

石川県自然史センター理事長 竹上 勉

第34回通常総会が令和5年6月17日(土)、石川県立自然史資料館コミュニケーションホールで午後2時から開催されました。

会に先立ち、高木前理事長の挨拶の中に、本県において、今後植物同定のできる人材は10名程度となることが予想され、2030年のRDB作成が困難になること、現在、地球環境基金の助成金を基に人材育成に当たっているが、成果は未定であり、行政の助力が必要との話がありました。

次いで、林前副理事長から総会が成立している旨の報告があり、議長選出については、事務局案の西岡 登氏(石川植物の会事務局)が拍手をもって選出されました。

紙面の関係上、以下、主な報告・審議事項について記します。

報告1. 一般会務報告

令和4年6月総会後から本年5月までの1年間で行われた会議、各種委員会・連絡会・研究会、講演会、いしかわ自然史塾(2年目)、自然観察会等の実施が時系列に報告されました。

報告2. 令和5年度地球環境基金(独立行政法人環境保全機構)からの助成交付金の決定について

令和5年度も過去2年間に引き続き、自然史環境調査に関する「いしかわ自然史塾」人材養成プロジェクト講座に助成金が内定されました。

報告3. 会員数の現状に関する報告について

会員数の現状は、次の通りです。

正会員(団体)	28団体
正会員(個人)	84名
賛助会員(団体)	2団体
総計	114

審議課題1. 令和4年度の事業報告及び収支決算

1) 調査研究普及事業

① 自然史環境調査人材養成プロジェクト講座

植生調査ができる人材養成を目的とした「いしかわ自然史塾」2年次を能登地区で開講しました。七尾市を主会場に6日間の研修内容を設定したところ、珠洲市輪島市をはじめ能登半島一円から15名の受講者が集い、実りある講座を行うことができました。海士岬海岸(志賀町)、唐島神社社叢林(中島町)、青島(七尾北湾)、石動山(中能登町)など、能登の多様な植生域を実習地に選定して研修を行ないました。

② 第32回自然史シンポジウムの開催

テーマ:「感染症～水と環境の視点から」

基調講演演題: 人と感染症のなが～いお付き合い
安田直史氏(近畿大学教授)

話題提供者: 倉本早苗(県保健環境センター)
永井三岐子(ほくりく未来基金)

座長 竹上 勉(県自然史センター副理事長)

③ 自然観察会・施設見学会事業

「初夏の能美里山回廊を巡る」「富山湾に流入する川とスギの巨木観察」「滝ヶ原・那谷寺・小松城址の石の文化にふれる」の3回を実施しました。

2) 自然史系団体交流連携促進事業

第18回活動交流会・研究発表会の実施

① 石川県植物目録2020(維管束植物)冊子及び電子版の編集と出版

古池 博(石川県絶滅危惧植物調査会)

② 粘菌の餌の感知についての研究

小松高校理数科課題研究班(5名)

③ 外来種シタバニハゴロモの生態調査とDNA解析

嶋田敬介(県立自然史資料館)

④ 新型コロナウイルス変異とウイズコロナ

竹上 勉(ウイルス自然史研究会)

⑤ 石川県立自然史資料館の近況

中村浩二(県立自然史資料館)

3) 博物館指定管理受託事業

令和4年度は指定管理期間5年間の1年目。コロナの影響下、縮小されたものもあったが、企画展、イベント、自然史講演会等を実施しました。

4) 情報交流出版事業

いしかわ自然史の発行、自然史センターホームページの更新をしました。

審議課題2. 令和5年度事業計画及び予算

今年度は自然史資料館周辺調査事業、いしかわ自然史塾3年次加賀地区、他、令和4年度同様。

審議課題3. 役員の選任

現役員の任期2年が満了となり、高木政喜(自然史センター理事長)、林 良征(同副理事長)、中村浩二(前自然史資料館長)、大深伸尚(アルスコンサルタンツ株式会社取締役会長)の4氏が退任され、池端弘久(北陸ESD推進コンソーシアムコーディネーター)越石あきこ(夕日寺自然体験実行委員会代表)、西岡 登(石川植物の会事務局理事)の3氏が選任されました。

後日、令和5年度第1回理事会で新体制が決定されました。

自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ

自然史エッセイ

蝶に魅せられて 50余年

石川県立金沢泉丘高等学校
吉村 久貴



小学生であった1970年頃、今よりずっと自然が残っていた。夏になると、仲間とカブトムシやクワガタムシを採りに行った。美しい翅をもち、種類の多い蝶に惹かれていたのは、同級生の中でも私だけだった。網で採集しても、持ち帰ることが難しく、家で飼うこともできなかったからだと思う。そんな折、母の知人であった山本順子先生から採集した蝶を傷めずに三角紙に包む方法と標本の作り方を教わった。中学1年の春の遠足の際、内川のスキー場で初めてギフチョウを採集した。自分で展翅して仕上がった標本を見た時、この美しい蝶を一生追いかけてみようと思った。

幻の蝶・憧れの蝶を求めて県外まで出かけるようになったのは、大学生になってからである。富山県の山奥で、雪渓の上を翔ぶ鮮やかなオレンジ色の蝶に初めて出会った。高山蝶の一種とされているクモツマキチョウである。40年以上、この妖精のような蝶に会うために、ニリンソウの咲く頃、毎年出かけている。

2009年7月、石川県では絶滅したと思われるクロシジミを狙って、福井県に出かけた。地名だけを頼りに探すと、見慣れぬ黒っぽい蝶を見つけた。そっと近づいて確認すると、クロシジミの♀であった。

約20頭のクロシジミを見つけたが、早ばかりであった。採集者が来ており、次々と網に入れていた。♀の採集を控えなければ、個体数が激減してしまう。初めて採集圧というものを感じた。高校時代に、蝶の撮影をしていたので、写真に残そうと、すぐに帰宅。一眼レフのデジカメを購入し、翌々日に再び訪れた。

それまでの30年間で約180種の蝶を採集していたが、マツムシソウで吸蜜する艶やかなクジャクチョウを撮影した頃から、撮影にのめり込むようになった。かなり珍しい蝶に遭遇した時、網を振らずに撮影に専念できるだろうか？逃げられてしまうくらいなら、採集した方がいいのでは？一度も見たことの無い蝶の多い私が、一生で何種類ほど撮影できるだろうか？そんなことを考えながら、網をカメラに持ちかえた。

それからの15年、まだ見ぬ蝶を求めて、北海道や九州、沖縄・石垣・西表・与那国まで何度も足を運び、国内では248種を撮影、未撮影の土着種は数種だけとなった。蝶を見るとすぐに網で追いかけていた頃と異なり、近くの花にとまるまで静かに待ち、良い角度で翅を開くまで息を殺し、チャンスにシャッターを押しまくる。じっくり見ていると、次に何をしたいのか、蝶の気持ち・習性が見えるような気がしてきた。

1980年代、関西以西の草原に広く生息していたオオウラギンヒョウモンは、秋吉台や九州の自衛隊演習場でしか見られない。幼虫の食草となる植物が残っているからである。昆虫の繁殖力は強く、採集によって絶滅した種は皆無に近い。生息環境の悪化が減少の主因である。採集禁止にするだけでなく、多大な労力を使って生息地を守らなければ、絶滅危惧種は救えない。



クモツマキチョウ♂



クロシジミ♂



クジャクチョウ♂



オオウラギンヒョウモン♀

自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ

INFORMATION

■ 石川県立自然史資料館 第35回 企画展 夏の昆虫大集合！～昆虫はなぜ光に集まるのか？～

内容：夏の夜、街灯の光に集まる沢山の昆虫たち。「飛んで火に入る夏の虫」という諺があるように、昆虫が光に集まる現象は古くから知られていましたが、実はまだ解明されていないことも多いのです。この展示では、光に集まる多様な昆虫たちを標本で紹介するとともに、昆虫が光に集まる仕組みや理由について解説します。

期間：2023年7月1日(土)～10月1日(日)
9:00～17:00【入館は16:30まで】

場所：石川県立自然史資料館 2F 企画展示室

会期中
無休

入場
無料



街灯の下でみつめたカブトムシ



灯火に飛来したオオミスアオ

この他にも企画展関連行事を予定しています。
詳細は自然史資料館HPをご覧ください。

石川県立自然史資料館 ホームページ
<https://www.n-muse-ishikawa.or.jp/>

石川県立自然史資料館 QRコード▶



発行／特定非営利活動法人石川県自然史センター 編集／いしかわ自然史編集委員会
〒920-1147 金沢市銚子町441番地 (石川県立自然史資料館内) TEL.076-229-3403・3450